がんぎ考

弁才船の船着場についての考察

辻　　啓介*

On Study for “Gangi”, the Pier of the Old Japanese Harbor

Keisuke TSUJI

Abstract

As for the wild “Gangi” in Japanese “goose tree”, it means the state that the group of the wild goose flies in the sky, and a stairs-shaped pier of old Japanese harbor. This report was showed the result of investigation of the remains the old pier of the harbor on inland sea “Setonaikai.” And it commented on the piers at the place where it was named “gangi.”

1．序

菱垣廻船・樽廻船など言葉で代表される江戸時代における内航海運、その創生期に発展を支えた和船の研究は、残された図面などから多数行なわれている。そして、その研究成果は、書籍としても多数が出版されている。これらの研究は、図面として残された船の構造などから行なわれたものであり、実物大模型を復元し操縦性能実験も行なわれている。(1999 年帆走実験の後に、「なにわの海の時空間」に展示保存している。) しかし、江戸海運を別の方面から支えたであろう船頭の操船技術、港湾施設に関する研究は、資料的が文字として残されたものが少なく、時間の流れの中に埋もれ、十分な研究成果が出ているとは言えない。

江戸時代における和船操船技術の一つとして、瀬戸内海の船路(航路のことであり、海路とも呼ばれる)を調査している中で「がんぎ」という言葉に突き当たった。瀬戸内海の沿岸一円において和船を接岸するところを意味し、現在の「桟橋」に当る意味を持っている。そこで、各地の残る江戸時代の湊跡(多くの場合、現在の漁港などになっている)を訪ね、江戸時代の船着場について調査した。今報告は、十分な結論が出たものではないが、今までの調査研究の成果をまとめたものである。

2．「がんぎ」とは

「がんぎ」とは「雁木」と書き、大空を並んで飛ぶ雁の群れの様子から「ぎざぎざした形のもの」を示す言葉である。死後になりつつあるようだが、家屋内の階段を意味する地方もある。

＊商船学科

2003 年 9 月 12 日受付

2.1 出会い

山口県柳井市に残る旧商家の街並み「白壁の街並み」の保存会事務局長である国森氏から、船を留めるための施設「がんぎ」という言葉を聞いた。国森氏からは「白壁の街並み裏を流れる柳井川は、江戸中期まで商家に直接船を着ける事の出来る桟橋があって、当時の繁栄を伝える「がんぎ」が残る。当時、どれくらいの大きさの船が入って来ていたか調べてほしい。」との依頼を受けた。依頼の対しての調査研究の成果は、柳井川の埋立ての歴史として既に公表[1]しているが、その時以来、「がんぎ」という言葉の響きが頭に残り、機会があるごとに調査を行なっている。

2.2 言葉の意味

図1は広辞苑に示された「がんぎ(雁木)」を抜粋したもの[2]である。本調査研究の対象は「②船着場の階段のある桟橋」であるが、後に示すがスロープになっている船着場を「がんぎ」と呼ぶところもある。図中の挿絵にある雁木棚の形状は「がんぎ」の意味するところをハッキリと示しているもので、何処かの旧家で見たような記憶がある。

また、家屋内の階段を意味する説明はない。しかし、旧家では階段の側面に引き出しが付いていることがあり、階段の側面が雁木形状をしていることから階段を意味することも想像できる。

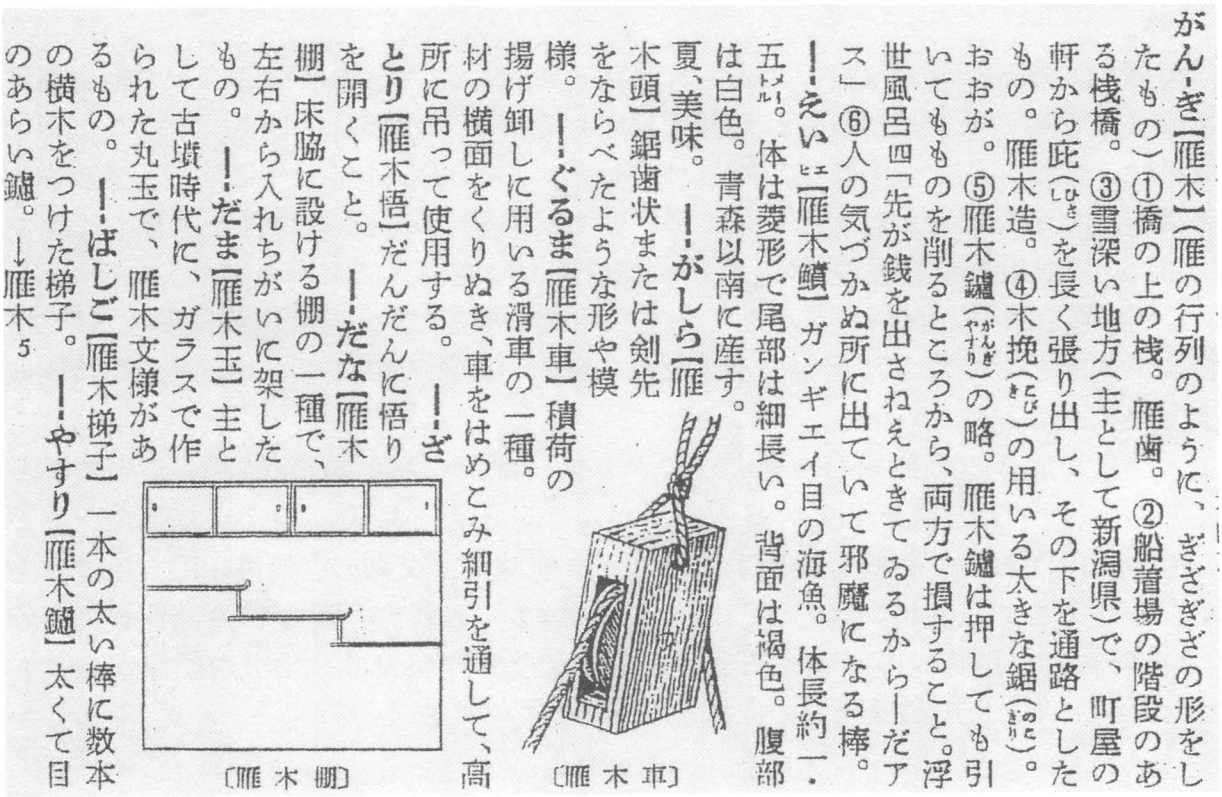
がんぎ【雁木】(雁の行列のように、ぎざぎざの形をしたもの)①橋の上の桟。雁歯。②船着場の階段のある桟橋。③雪深い地方(主として新潟県)で、町屋の軒から庇(ひさし)を長く張り出し、その下を通路としたもの。雁木造。④木挽(こびき)の用いる太きな鋸(のこぎり)。おおが。⑤雁木鑪(がんぎやすり)の略。雁木鑪は押しても引いてものを削るところから、両方で損すること。浮世風呂四「先が銭を出さねえときてゐるから―だアス」⑥人の気づかぬ所に出ていて邪魔になる棒。
―えい【雁木鱏】ガンギエイ目の海魚。体長約一・五メートル。体は菱形で尾部は細長い。背面は褐色。腹部は白色。青森以南に産す。夏、美味。―がしら【雁木頭】鋸歯状または剣先をならべたような形や模様。―ぐるま【雁木車】積荷の揚げ卸しに用いる滑車の一種。材の横面をくりぬき、車をはめこみ細引を通して、高所に吊って使用する。―ざとり【雁木悟】だんだんに悟りを開くこと。―だな【雁木棚】床脇に設ける棚の一種で、左右から入れちがいに架したもの。―だま【雁木玉】主として古墳時代に、ガラスで作られた丸玉で、雁木文様があるもの。―ばしご【雁木梯子】一本の太い棒に数本の横木をつけた梯子。―やすり【雁木鑪】太くて目のあらい鑪。↓雁木5

図1　「広辞苑」に示された「がんぎ」(文献(2)より)

図2は摂津国の名所を絵で示す「摂津名所図会」に描かれた「安治川橋」で多数の廻船で賑わう大坂安治川橋付近が描かれている。現在の大阪中央卸売市場のある大阪市此花区野田及び港区川口付近である。当時から全国の産物を集めて商いする場所であった。

その中に船着場の「がんぎ」が描かれている。その部分を右に拡大した。階段状の水辺に廻船が係留されて荷役作業が行われている様子が描かれている。図３は大坂商人の仕事の様子を絵で示す「商人生業鑑」には、船着場の雁木に横付けしている伝馬船（沖合に停泊した廻船から荷を積替えて岸に運ぶ舟）から盛んに陸揚げする様子が描かれている。

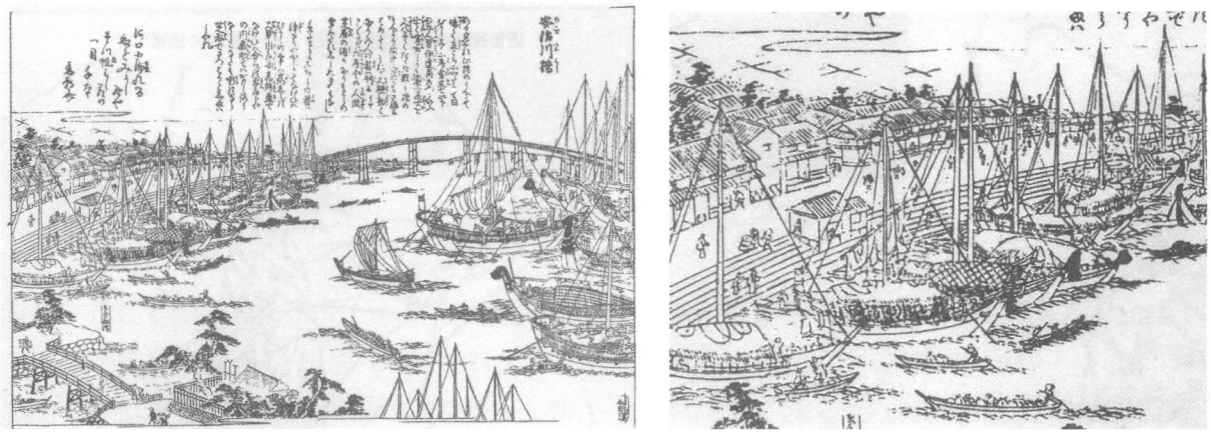

図２　大阪安治川橋付近の船着場（右は拡大図）
（摂津名所図会＝文献(2)より）

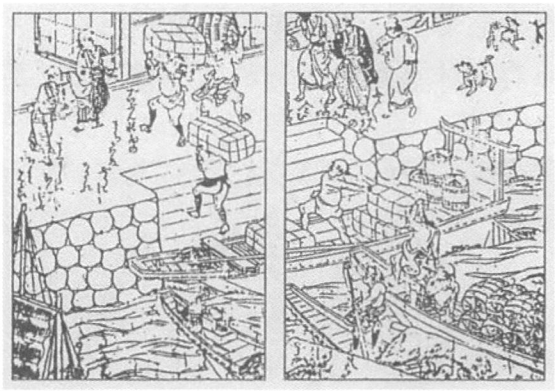

図３　江戸時代の大坂での荷役風景
（「商人生業鑑（東京国立博物館蔵）」より）

船着場に何故階段が必要であったのか。それは、潮汐の影響を受けて停泊中の廻船の舷側高さが変化するために、荷役作業に不便であり、舷側の高さに応じて渡り板を架ける高さを変化させるためと考えられる。その形がぎざぎざの階段状になっていたために「雁木」と呼ばれた。

2.3 柳井川の「がんぎ」

国森氏が示した柳井川に残る「がんぎ」の一つを写真１に示す。現在の柳井市の市街地中央にある宝来橋脇に残る「がんぎ」である。石積みの様子から古い「がんぎ」であることが想像できるが、建設の時代を特定する資料はなく、時代は不明である。「がんぎ」横には石灯篭がある。

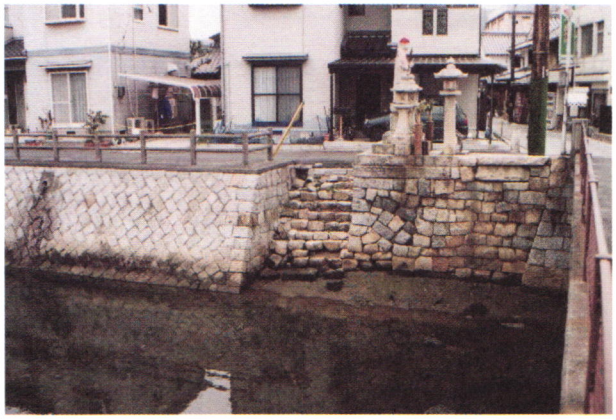

写真１　柳井川宝来橋脇の「がんぎ」と石灯篭

図４に示す柳井市図書館蔵の寛文御領内絵図（寛文８年＝1669 年）によれば、当時の柳井川河口は現宝来橋付近であり、「がんぎ」の上に立つ灯篭は、柳井津（湊）に出入りする船に津の位置を知らせる常夜灯であると考えられる。また、姫田川河口（現在の柳井川との合流部）付近までが柳井津であったことがわかる。当時の海岸地形は湊としての機能を発揮していたような形をしている。しかし、現在は埋立てられており、桟橋としての「がんぎ」があったとしても、その様子を窺い知ることは出来ない。宝来橋脇のこの「がんぎ」が当時から存在するものであれば、名残の「がんぎ」であることは想像できる。

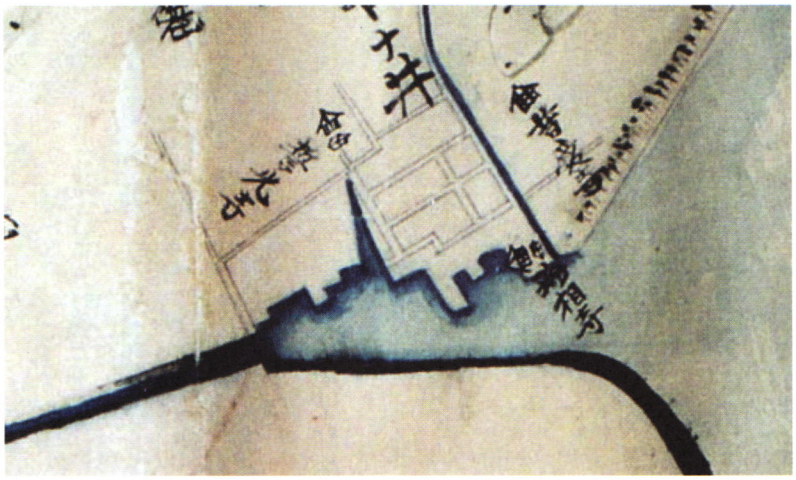

図４　寛文御領内絵図（模写図）の一部（柳井市図書館蔵）

３．瀬戸内海に残る「雁木」

江戸時代の瀬戸内海航路において重要な中継地点である要所には、当時の「雁木」の様子が窺える階段状の船着場跡が残るところがある。その幾つかを紹介する。

3.1 鞆の浦

広島県福山市の鞆の浦は、奈良時代から瀬戸内海航路の要所としての歴史がある。江戸時代には北前船の寄港地として、昆布やニシンが陸揚げされ、地場の畳表、船具、保命酒などを運び出す商業港であった。鞆の浦には、現在も江戸時代の港湾施設の４点セ

ットである「常夜灯＝灯台の役目をする灯篭」、「がんぎ・波止場」、「焚場（たでば）＝船の修理場」「船番所＝出入りする船を監視する」が揃う貴重な江戸時代の湊遺跡である。「がんぎ」の上には、船を繋ぎとめる「つなぎ石」もある。

写真２は、現在の鞆港の奥に残る「常夜灯脇のがんぎ」と「つなぎ石」である。奥に焚場跡と言われる砂浜が見える。この「がんぎ」は文化８年(1811 年)のものと伝えられている。

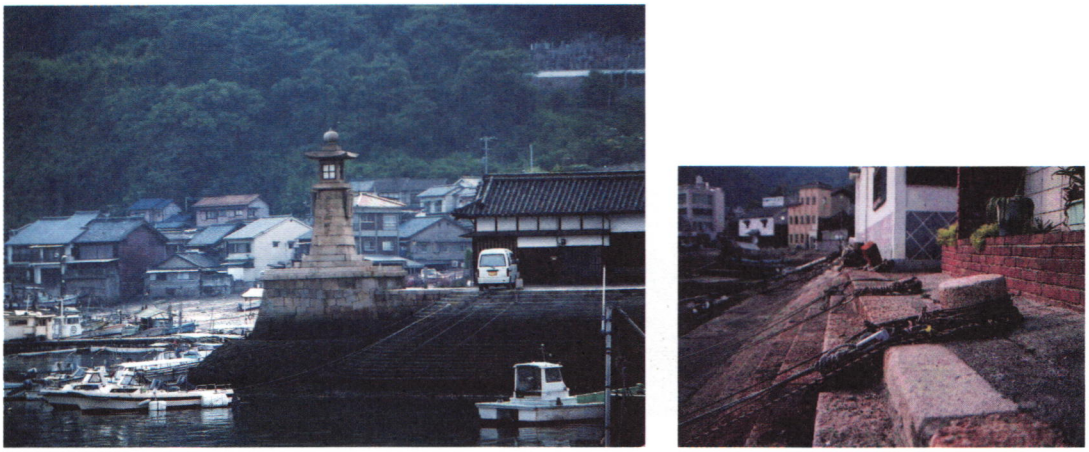

写真２　福山市鞆の浦の「常夜灯とがんぎ」と「つなぎ石」

3.2 下蒲刈

広島県呉市沖に浮かぶ下蒲刈島は、朝鮮通信使の宿場として有名なところである。その地理的条件から江戸時代の貴重な廻船寄港地であった。江戸時代初期に、福島正則が幕命によりここに本陣を設置し、海駅を設け、長雁木（地元では福島雁木と呼んでいる）を建設させた。現在は、下蒲刈三之瀬は漁港としてのみ活用されており、当時の構造を残した湊遺跡と考えられる。本陣跡は下蒲刈町役場庁舎になっており、その前に長さ約 55.5 メートルの「がんぎ」がある。階段は 14 段あるが築かれた当時は 11 段だったという。（写真３）

写真３　「長がんぎ」（下蒲刈町）

3.3 尾道

尾道駅前の南、川のような海である尾道水道は、古来よりの海上交通の要所である。江戸時代初期には北前船の寄港地として栄えた。かつては、尾道水道の各地に「がんぎ」を見ることが出来たが、駅前の再開発とともに海岸が整備され、江戸時代をしのぶ「がんぎ」の姿は見えなくなった。しかし、その所々に若干の姿を見ることができる。(写真4)

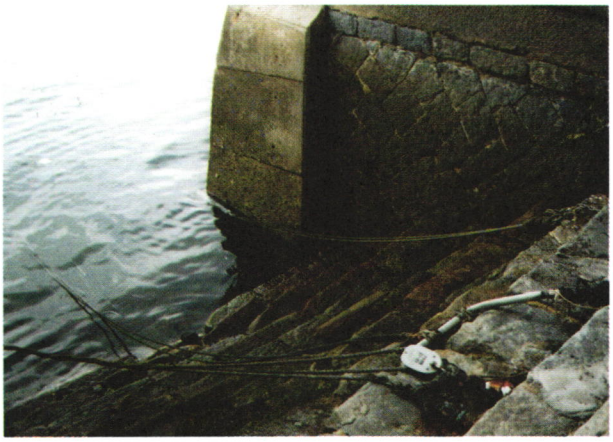

写真4　尾道水道に見られる「がんぎ」の名残

3.4 「がんぎ」の名残を示すもの

この他にも、瀬戸内海沿岸の海上交通の要所とされている湊跡には、「がんぎ」が存在していたであろうと考えさせるものが残っている。

山口県防府市の中関港では、向島側に幾度となく積み重ねられた石積みの中に、古い階段状をしたものが側面から見えるところがある。江戸時代までの中関湊は、埋立てられ市街地となっているが、向島との間を中関と呼ばれる。これは周防3関(下関・中関、上関)の一つで瀬戸内海航路の要所であった。

山口県岩国市の錦川湖畔にある「八百新酒造」は清酒「雁木」を製造している。これは、ホームページにおいて、その由来を「われわれが造る酒と原料米は錦川の上流から下ってくる船で運ばれ、ここから水揚げされていました。」と述べ、その原点である「雁木」を新造酒の銘柄として名付けている。10年ほど前の河川整備工事で、「がんぎ」は取り除かれて堤防となっている。

4．階段状ではない「雁木」

東海道の宿場町「舞阪宿」として発展してきた静岡県舞阪町は、浜名湖今切口の今切渡しを抱える宿場町である。今切渡しの舞阪宿側の渡し船場として「雁木」が存在した。渡し船場は利用する階層によって3区分され、最も北にある「北雁木（写真5）」は大名用として使われていた。「中（本）雁木（写真6）」は武家用、「南雁木（渡荷場）（写真7）」は庶民用として、また、荷物の積みおろしに使用された。(舞阪では「がんぎ」とは読まずに「がんげ」と言う。北雁木側の舞阪町教育委員会が設置している史跡説明には「雁木とは階段状になっている船着場のことを言うが、地元では「がんげ」と昔から言っている」との説明があった。) 明暦3年(1657年)から寛文元年(1661年)にかけて

構築された。写真でもわかるように常夜灯が設置されていたものと考えられる。

読み方はともかくとして、江戸時代初期に作られた舞阪宿の船着場に対して「雁木」を名称として使われている。このことは、階段を意味する「雁木」ではなく、船着場としての意味を持つ「雁木」が瀬戸内海から伝わったものではないかと想像できる。

写真５　北雁木（静岡県舞阪町）

写真６　中(本)雁木（静岡県舞阪町）

写真７　南雁木（静岡県舞阪町）

５．江戸東京博物館に見る船着場

東京にある江戸東京博物館には、江戸時代の庶民生活の様子を展示している。その中で、「隅田川と両国橋西詰」のパノラマ展示には、江戸時代の船着場と考えられる３つ

の船場がある。写真８は「雁木」である。残りの２つについては、本調査が足らずに正式な呼び名は不明であるが、写真９を「掛け出し」、写真10を「桟橋」と名付けた。

写真９の「(仮称)掛け出し」は、岸から沖に向って支柱を打ち込み、桟板を沖にいくほど低くしているもので、潮汐による海面の昇降の影響を桟板の適当な場所を選ぶことで克服するものである。ある程度までの海面の変化に対応できる。写真10の「(仮称)桟橋」は、掛け出しと同様に支柱を打ち込んで桟板を張ったものであるが、桟板に高低がなく、海面の昇降が少ない船着場のものである。現在でも、琵琶湖等のように湖面の昇降が少ない湖や池などでしばしば見ることの出来るものである。

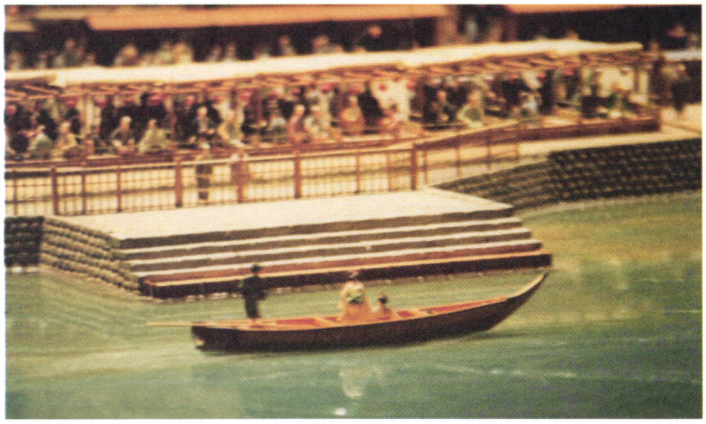

写真８　船場「雁木」　江戸東京博物館

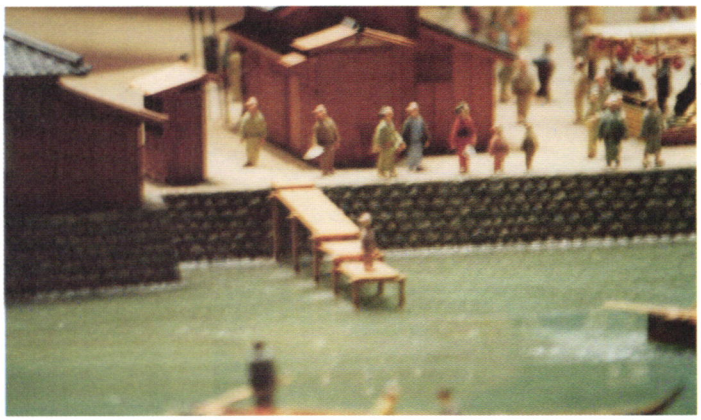

写真９　船場「(仮称) 掛け出し」　江戸東京博物館

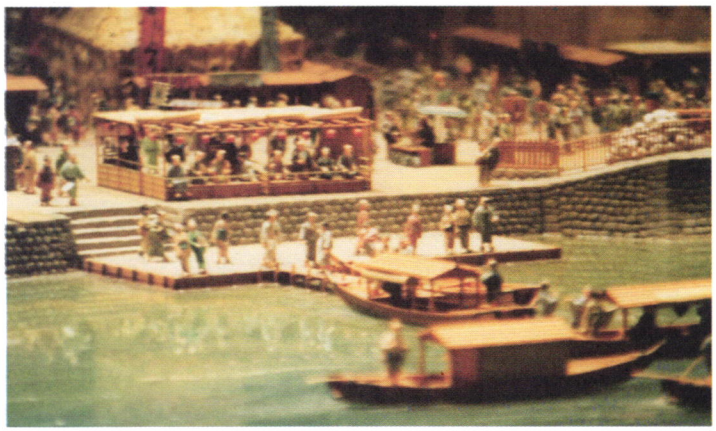

写真10　船場「(仮称) 桟橋」　江戸東京博物館

6．結言

瀬戸内海の島々にある漁港では、階段状の船着場に漁船を接岸しているところをよく見る。しかし、今までの調査において、瀬戸内海に多く見ることができる階段状の「雁木」は、瀬戸内海以外では、あまり見ることがない。船着場としての「雁木」は、決してポピュラーな船着場ではないようである。潮汐の影響が大きな瀬戸内海での知恵の現れであろうか。

江戸時代の湊の風景画を見ても、階段状の「雁木」が描かれた湊は瀬戸内海を対象としたものに見るだけである。大都市江戸の船着場の風景には、「掛け出し」が多く描かれている。瀬戸内海ほど潮汐の影響が少ない江戸湾では、階段は不要であったのだろうか？しかし、江戸幕府が流域改修を行なった利根川水系には階段状の船着場跡があると聞いている。さらなる調査が必要である。

舞阪宿の今切渡しの船場にあるスロープを「雁木」と呼ぶことには、非常な興味を覚える。江戸時代には「雁木」が船着場の名称として使われたものではないかと考える。しかし、言語としての「雁木」についての調査研究は十分でなく、断言することはできない。

本調査研究に関して、その始まりの段階でいろいろと助言提案していただいた国森氏を含めての「柳井川がんぎの会」の皆様にとともに、突然の質問に快く答えて頂いた多数の現地の皆さんに感謝する。

参考文献

(1)辻啓介：柳井川の歴史は埋立ての歴史、柳井川川造りセッションにて講演(2002年4月28日)，http://ganngi-yanai.hp.infoseek.co.jp
(2)広辞苑、岩波書店
(3)石井謙治：江戸海運と弁才船、海の歴史選書２、日本海事広報協会、1988。
(4)鞆の浦を世界遺産にする会：歴史の回廊、ホームページ
http://www2.odn.ne.jp/tomonoura/rekisi
(5)澤村船具店(福山市鞆の浦)：雁木、ホームページ、
http://www2.odn.ne.jp/sumler/kawaraban/annai/gangi
(6)広島県：ホームページ“すこぶる広島”、海の風景、
http://www.pref.hiroshima.jp/sukoburu/